獄中

木版

村山知義

マヴオ 2

半年・二圓四十錢
一年・四圓八十錢

40 Sen

大正十三年十月十日印刷納本
大正十三年十月一日發行

著作人兼發行人 村山知義

東京市牛込區若松町十番地
印刷所 中央美術印刷所
東京市牛込區若松町十番地
發行所 マヴオ出版部

滝線撤回騒ぎ

（一幕構成劇）

岡田龍夫

舞台、客席、暗黒、黒幕。

「エーッ、蓄生!!」

と大聲で叫ぶと同時に全部點燈、黒幕落ち右隅へたぐり寄せられる。すぐにまた消える。蒼いフットライトに照らされて上半身のみ赤い布をまとへる男舞台中央に棒立ち。背景は圓く一面新聞紙を張り樂書がしてある。フットライト消える。天井から黄ろいスポットライトが出て背景の上部右隅を照らす、と同時に男の拳骨一尺あまりニューッと新聞紙を破りて現はる。光急速に左に廻る。次々に十二本の拳骨現はれて舞台客席共に點燈。觀客席の後方よりケタタマシきベル鳴る。(三十秒位)

男「皆さん、實のところ僕達は芝居なんかやりたくはなかつたのです。」

拳骨の十二人「止せ、止せ、止せ、やめろ、やめろ、チェッ! おちアもうやめだ」

各自爵憤ばらひと云つたていやわいわい騒ぎ出した。

樂屋にて道具方が慌しく取りかたづける音がする。ガタガタガタドンドン、バタン、キャッ!……ヤレ、ヤレ、あぁ……等。

男「おしまひ、おしまひよ、おしまひ」

と客に向つて宣言する。

十二人「ヌアッ……」

と一セイに背景を押し倒して現はれて自分達も倒れる。男は倒れた背景の中にうづまつて悲鳴をあげる。

女優、道具方、舞台監督、作者等慌てて引つ込む。樂屋マルミエ、消燈、亡國的な音調のチャルメラ、ドラ、あんまさんの笛等聞ゆ。ドーン、大鼓が響く。パチン、ピストルが響く。點燈。舞臺後方に徐々と黒幕を引く。白い衣をまとへる女、等身大の齒車を轉がしながら右より出て、倒れた十三人の男の上を一廻りして左に入る。客席後方よりケタタマシきベル鳴る。

ベルの鳴るところより青い職工服の男、眞赤な尾を引き、十二人のはらめる淫賣婦をその尾に一間置きに連結して客席中央を押しわけながら登場。ベル止む。今出てきた十三人は倒れてゐる十三人の男を摑んで客席にほり出す。ほり出された十三人は四ツばひになつて逃げ見物人となる。職工服の男、舞臺中央に立ち十二人の女背を向けて男を圍繞し、腹をかかえながら男を振り返つて叫ぶ。

「れェ、ちよいと、これから何うする?」

男「ウーヌ俺は疲れた」

客席の天井より「奪へ、殺せ。」消燈、又點燈。十二人の女慌てて逃げようとする。だが赤いシッポのため動けない。客席の天井より「奪へ、はらめる女等の苦しみを。殺せ、あらゆる笑ひの根しさを。」消燈。舞臺のみ蒼白い光を電波の如く各所に放つ。

舞臺天井より黒い布に包まれた人體、逆さになつて三人ブラサガル。點燈。女は凡てうつ向きに倒れてゐるがニンシンのため臀部のみ奇怪にふくらみ上つてゐる。

男は天井を見たまま目をつむる。急に破れるばかりの怪音劇場各所より起こると見物人化した先刻の十三人立ち上り

「おしまひ、おしまひよ、お――し――ま――ひ」

天井からの三人「皆さんこれは又何んと馬鹿臭た芝居です。」

ゆれながら天井へ消える。十三人の男舞臺へはひ上る。赤布を上半身にまいた男は中央に立つて目をつむつてゐる男をつき倒して已れは反動で後ろに倒れる。他の十二人の男は倒れた十二人の淫賣婦の臀部をチゲリツケルと女達は急にハネ起きて足をヒロゲ、產前の苦悶の樣子をする。男達はエリ首より左手を突き込んでメイ兒を引き出す。凡て動物。(犬、猫、ブタ、鶏、ニワ、牛、鹿等のオモチャ、實物ならなほよし)

ポロボレがMATAからボタボタ落ちろ。

――幕――

マヅオの廣告

△マヅオ建築部。
「最上の或ひは究局の藝術は建築なり」との構成派の原理を具體化するためマヅオは建築部を設けて、もうだいぶ仕事をした。建築設計、住宅商店飲食店等の内外藝術化、壁畫、看板、ポスター、ショーウヰンドー等の製作、舞臺裝置、照明、家具、印刷等に關する一切を引き受ける。事務所は村山方。

△チェルテルの會。
音樂、舞踏、詩、劇等の合一を目的として、秋田雨雀、高田守久、恒川義雅、毛利幸尙、村山知義、等に依つてチェルテルの會が起された。第一回は六月二十八日の晩、本郷追分帝大基督教青年會館で催された。村山と岡田とが踊つた。高見澤のサウンド・コンストラクターが鳴つた。

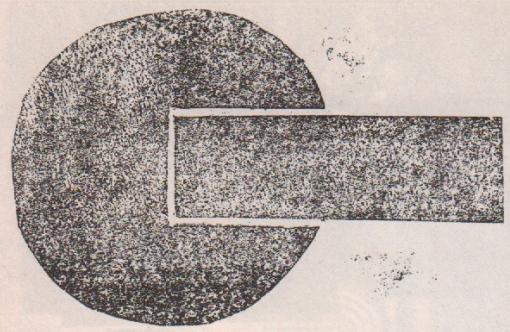
△マヅオ・グラフイーク。
七月十五日に第二集が出た。毎集一圓五十錢申込は村山方。

△村山は「みづゑ」七月號に論文「構成派批判」を發表した。

△柳瀬は「文藝戰線」に漫畫を描いてゐる。

△澁谷は「劇壇」で福地氏と盛んに舞臺裝置論をしてゐる。

△木下は七月六・七兩日福井の商業會議所で箇展を開いた。木下の作品七十余點にブルリユツク、バリモフ、パルスラバン、リユバルスキー等の作品を加へた。



運動のための一考案

イヤノフ・スミヤヴ井ツチ

おそろしくもなし
いたましくもなし
街頭に××を叫ぶ男ども
巷に★★を賣る女達
よろし　よろし
お前樣達にしあれば
おそろしからず、いたましからず
いまだ終極にてはなかりければ——
だが、ほんの一度で良いのだから！
憐なる群集を靜かに見てはどうだ!!
先天的不能力者、畸形兒、せむし、足なし、手なし、鼻つかけ、啞、盲目、つんぼ、ちんば、半陰陽、癩病患者、性的慢性病一切。
この行列の中の自分だと分つたら最後
耳の血の氣、背すぢの溫度も——
勿論晋段で居られ樣もないだらう!!
そら！皮肉な唄のたぐひを怒鳴る
眞赤に錆ついたぼろぼろの齒車
飛出て居るねじに延びつきりの螺線
膠の溶けたルーラで
なまくら鉋丁の斷裁で
その上帶革はちぎれちぎれで
カタマリきつた　オイル　オイル
これにモーターでもかけ樣もなら
總て工場は
シッ!!　シッ!!　もう止めろ!!!
この時男女は皆うなづきてはじめて不具者の群に入りければ不具者も一度に手を取りたり。
歌の中なる機械はことごとく輝き
動力も共に
響いよいよ高まれり
××を叫び沒落を望み
★★を賣りて死を望む
兩者對立の礎は成る
××　を叫べ　★★を賣れ
沒落　沒落　沒落　沒落
賣笑!!　賣笑!!　賣笑!!
ウラ
ウラ
ウラ

チツ井ヴヤミス・フノヴイ

エルンスト・トラーの詩二篇

村山知義譯

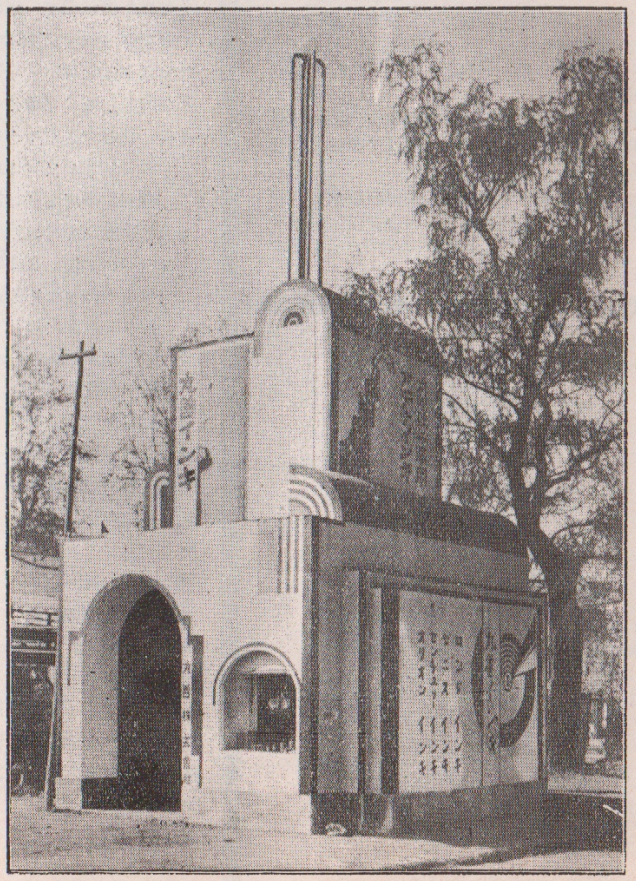
夜明けの工場の煙突

彼等はその眞黑な重みを薄明りの中に突き出してゐる、彼等は武裝して嚇しつけるやうにその身を上に伸ばしてゐる。
打ちこまれた楔のやうに彼等はか弱い朝靄を引き裂いてゐる、
そしてどんな溫かい心をもその身のまわりに寄せつけない。

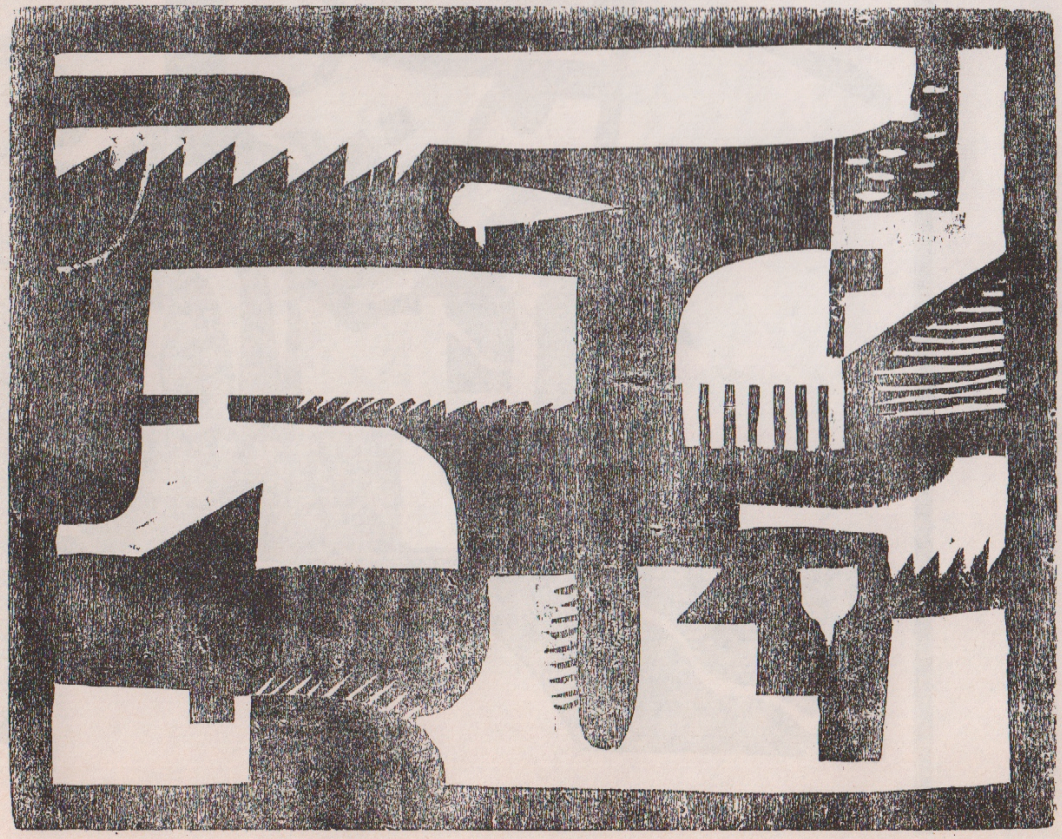
等の口からは眞黑な蛇が出て來て
絹のやうなヴェールで覆はれた蒼白い遠方へと
爬つて行く。
彼等は無言で宣言する。「我々は砦だ、盾だ！
火は我々の中に閉ぢ込められて悶いてゐる。」
菫色の笑ひと一緒に朝が來る。
空は深い青に滿たされる。
すると彼等は疲れ切つた凍えた番兵のやうに見
え弱々しく裸かに灰色になる、
そして神を生んだ澄んだエーテルの眞中に
しょんぼりとたよりなく立つてゐる。

俺はお前達を彈劾する

俺はお前達を彈劾する、人殺しめ、
俳りの詩句に隱れて遊び、響きやメロディーを
ひねくり廻した言葉で放蕩する
詩人め、
用心深く丁寧にとろびでいぶされた詩人め。
渦卷と暴動と戰の物音とを聞きながら、
よくよく聞きながら、尊大ぶつて笑つて、
白髮頭でうなづいて
平氣な顏をして立つてゐる。
書く——そして平氣な顏をして立つてゐる。
人氏は材料だ、
お前達にとつては御都合のいい材料だ——
お前達が爭つてゐる紳士方にとつても同じやうに。
お前達は叫ぶ、——「やつぱり人間だ」
いいや違ふ——お前達にとつては材料だ。
お前達はただ、空しい遊びにお前達を放つてや
る
烈しく搖き廻す力を知つてゐるだけだ。
俺はお前達を彈劾する、人殺しめ、
紙くず籠の中にびくびくして隱れてゐる詩人
め、
壇の上に立て、詩人め、被告め！
お前達の罪を淨めろ！
自分に判決を下せ！
詐欺師め！
そして……？
さあ裁け！判決を下せ！



廣告塔　大浦周藏



木版　村山知義

土を詠ある

フョードル・ソログーブ作

澤　青　譯

私は畑や木立を眺めてゐる
河や險しい聳え立つ谷の上に
漂つてゐる大氣の上に
息鎖を含む眞珠のやうな蜜雲は
それらの秘密を私は捉へた
あの彩られた雲の惟幕の蔭は
私にとつては生まれた土地である。

土は忌まはしく穢ならしい
けれどかんな私には生みの母である
お前を愛してゐるゥー啞の母よ
土は忌まはしく穢ならしい！
五月園に彼女に寄り添ひ乍ら
土を抱くことは何んと甘いことか
土は忌まはしく穢ならしい
けれどかんな私には生みの母である。

野原をひとり私は行く
土と私と、その他には無い
野原では明るく、生きゝしてゐる
私野原をひとり私は行く
蒼空の寶座の中に見る恒星を
野原をひとり私は行く
土と私とその他には無い。

お前達わが土に口吻けられまい
濕ひある母で上を聞き得まい
私が彼女に囁くやうに
私が彼女を口吻けるやうに、
寄添はふ寄り添はふ全身を
神聖な母性の體のかたく
地清淨な白い光明の中に
どこからか花や草はでて來たのか
どこからお前等兄弟姉妹は出たのか
私の抱擁は神聖であつたばかりだ。

わが路は險しくわが路は遠い
空つぽの土地を私はひとりで行く
けれど路々に歌びがあり
微笑して私を慰めてくれる
私は自分に感感をうける
そして怯びしもなく私は行く
わが野邊は廣く
わが霧は白い
月は大空に照つてゐる
そして私に風は自由に歌つてゐる
粗野な調のない談話でもつて
多くの風景があらうと歌つてゐる。

變しなきい皆さん土を土を
濕めやかな草の綠の秘密の中で
わたしはその秘密のなにかを知る
變しなきい皆さん土を土を
そしてかんな彼女の唇の甘さを！
綠も園もみんな私は受け入れる
變しない皆さん土を土を
濕めやかな草の綠の秘密の中で。

（了）

愛するこの人と題するタイトルの考察　　藤谷　修

會場と私
（諸國に於けるる意識的構的主義成第六回展）　　岡田龍夫

マヴオの窓

澁谷　修

○

四月號のアテリエを見たら、中川一政氏の「物と美」といふ一文が出てをつた、問題にするほどの事はないのだけれど、而し此の類の氣持に今の若い畫かき達が、多分はいいものを持ち合せ乍ら、それをこんな所謂相當中堅をなすべき作家の、頭の惡い物の云ひ方をした出駄羅目な考に囚はれて、自分でどうにも出來ず、あるひは大變いい事位に考へてゐるのを思ふと、現代畫家の無意識に驚かされざるを得ない。むしろ僕はこんなことを默つてほつておく若い人達の氣が知れないと思つた。

中川氏の全文を引用するのはた易い事だがそれはくだらない事だから止めて、必要な文句だけを擧げると、先づこんな事がある。

「美は物に宿つたり、宿らなかつたりします、物に美が宿れば物が美しいので、美が宿らなければ物は美しくありません。」

と云つてをる、何の事だか馬鹿くさくて冗談さへ云へない。更に

「自分は寫實派だからと云つていくら忠實にかいても美の宿らぬ物は矢張り、美のない儘で畫面に出て來ます、だから眞實の畫家は物をあてにせず、美をあてにします、物は美の住居でゐる事もあるし、ゐない事もある、私は物をあてにした爲一時仕事が行き詰りました、私は物をアテにしなくなり、美をあてにする樣になりまして仕事が樂になりました。」と云つてゐる。

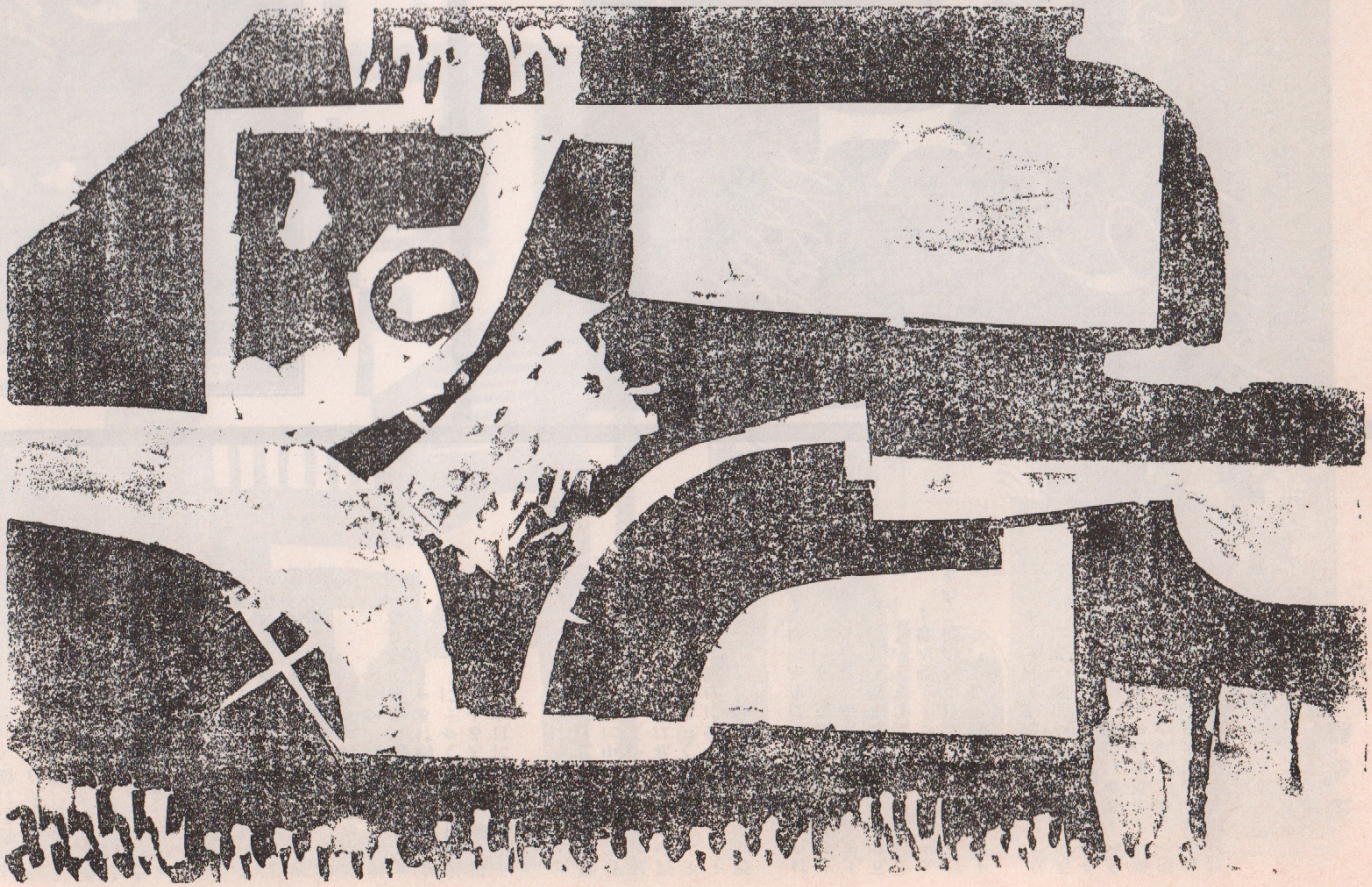
此の人の考によると、美は朝日に光る葉末の露の樣に形體も持つてゐるものらしい。(善意に解して美とは心の中に起きたエモーションが外部の形を求める事が、その求め得たところに美といふ言葉を使ひ得るかも知れないが――而し此の邊はカンヂンスキーのお茶をのませればダメだ)

物といふ不完全な物の云ひ方は、多分藝術の對象の事を云ふのであらうが、一體その對象は何でなければならぬといふのだ。

「美を見る道とは、自分が虛しくなつて美しいと思ふものをかくより外ありません。」あるひは「美しく思はなければ描かればよいのです。」などゝ云ふ言葉によつて見ると(此の言葉の矛盾は暫く貰めぬとして)氏の藝術の對象は飽く迄美でなければならぬものであるらしい。しかもその美は物といふ不完全な言葉を通して考へて見ると、自然でなければならぬものらしい。

さてそれならば、對象を假に自然として、そして自然の中にひそむ美としたならば、一體その美とはどんなものなんだ。

美でなければならぬといふ意味のある以上美に對する斷定的な言葉もなければなるまい。少くとも美といふ價値の上に於ても標準がなければならない筈だと思ふのにそれは餘りに漠然としてゐる。



雄達田月　らしがうまらくふは房乳

恐らくは此の人にはそれは云へないのだらう。云へないなら僕が云つて上げよう。

が美には固定的な價値も標準もないといふ事だ。と今一つは美は何ら普遍的永遠的なものではないといふ事である。(之についてはいくらも説明もし、例證も上げ得るが讀者を信じて此處では省略する)その意味に於て、此の人の强いる美は矢張り各人の主觀の問題であるらしい。あとでかう云つてある、

「物を見て美しいと思ふからには心に動きが出來るに違ひない、あゝいふ線が引きたくなりかう云ふ色が出したくなつたりする、その心の動きに適ふ樣な表現法をさるやうにする事が畫の勉强であります。」

之によつて見れば、嚴密に云へば、物といふ對象は、いさゝかも必要ではない樣である、であるのに先に「物を見て美しいと思ふからには」と云ふ以上、物を見て、その見る事によつて美を感じたら描けと云つてあるからには、物がなければ繪が出來ぬと思はなければならない。

わかり易く云へば、此の人の考を此の人の文章によつて見ると美といふものは、自分の心の內に湧くものではなくて、物といふ自然の中に存在してゐるものらしい、要するに落日が美し

いとか、リンゴが赤いから美しい位しか知らないものだ。そしてそれを美しいと思つたものだけに描きたい心を起して描けと云ふ樣な事を云つてあるのだから驚かずにはゐられなくなる。

而し此の人にでも心の中には、何かしら感じてゐるものと見えて、心の動きによつて好きな線や色をぬる表現法をとれと云つてあるが、若しさうなら、そしてそれほど心の動きが大事なら、何にも別に物といふ對象は必要あるまいと思ふが――

しかしそれらはすべて許す事の出來ない無意識によるもので、そして最早彼等は老い枯れ行く姿を我々に見せるにすぎないのだから。

若い人々よ、最早諸君は先輩と稱するかゝる類の言論に耳をかすな、すべてをブチまけて、たゞ一つ思ひつめてゐる己の心にかへれ。

藝術（形成）の對象が美でなければならぬなんて云つたのは過去の人間どもだ。そして如何に藝術の對象上の問題で、美術的價値や美學の力がか弱いものであるかを悟らなければいけない。

僕は中川氏の文をよんで、こんな連中にマヴォの活字のインクしみでも飲ませてやり度いと思つた。

隨分のみたい連中がゐるだらうと思ふからそんな連中はマヴォをたづねて來て貰ひ度い、そんな事はマヴォは親切だからきつとよく煎じてのませてくれるだらう。

僕はまだ此の中川氏の文に對していろ／＼の事を云ひ度いと思つたが、殘念乍ら時間が無いのでこれで止める、がいつか又機を見て書かう。

△

それから此の間ある人が（勿論それも若い人だ）岸田劉生がマヴォもあつてもなくてもよいと云つたと云つたが、これだつて今云つた事と全然縁のない事でないから、少し書いておき度いと思ふ。僕に云はすりや、さう云ふ君こそどうでもいいと云ひ度いのだけれど、さう云つて了へば曲が無いから、假に君なんかない方がいいと云ひ切つておいて、さて多少とも君の持つてゐる樣な氣持に近い人のために少しマヴォの有難味をなめさして上げやう。

尤も本當に味ひ度いものは、マヴォを訪れる事と、雜誌マヴォを買ふ事だ、そして事實上さう云ふ人々が増しつゝあるから別に心配はないがよしそれならば君等の不見識な不遜な言葉からたゞして見よう。

僕はマヴォはあつてもなくてもよいと云ふ言葉をきいた時、すぐ「ぢア君はマヴォは何であるかを知つてゐるか」ときいたら、知らないのだと云つた、同樣に岸田が何故どうでもいいかも云ひ得ないのだつた。

僕は意氣まいて最初の言葉をきゝ乍ら更に此の答をきいた時、實はガツカリした。ガツカリし乍ら「君達は君達自身に對して不忠實だ、それと同時にそんな自分だけ物のわかつた樣な、實はちつともわかつてゐない言葉は吐くな」と云つたら、改めて僕の前に冗談だと云つて謝した。だが僕には斷じてそれを冗談だとは受取られなかつた。今の多くの人々の持つてゐる事實上の氣持に違ひないと思つた。

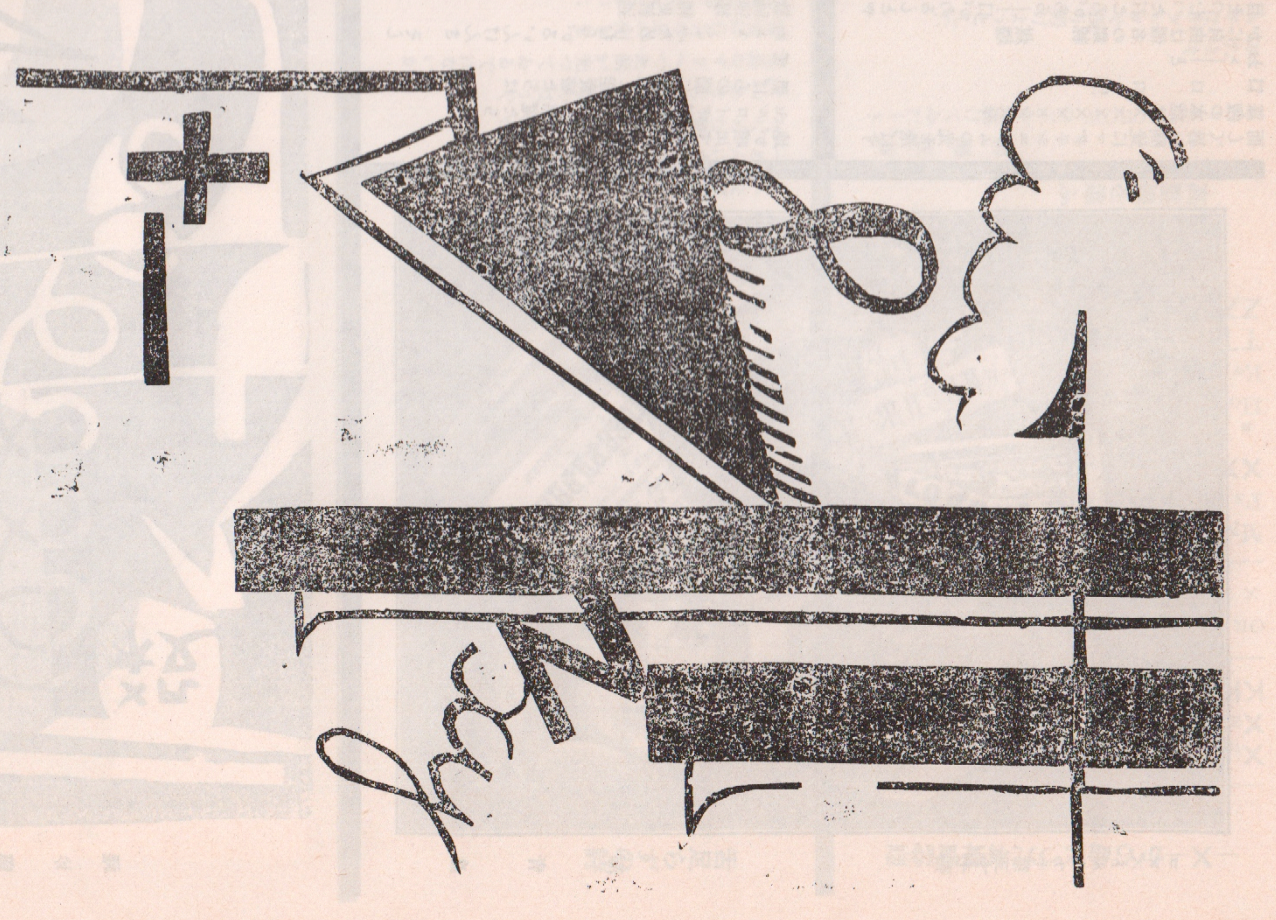
どうでもいいなどと、云ふ言葉はどんな時にでも使用出來る言葉だ、そしてそれほど不忠實な言葉はないと同時に己の無智を證據立て己に對する不眞面目さを示すものだ。

若し本當にマヴォなんてどうでもいいなら、どうでもよくないもの、あるひはどうでもなくてはならないものを見せてくれ。むしろその方がどんなに僕達にとつてうれしい事か。

マヴォなんてどうでもいいと思つてゐる人々は勿論それは此の人々の勝手だが、しかしやがて、如何に我々が不可避的なものであるかを悟らずにはゐられない時が來るであらう。

その時のために我々は奮鬪する。

そしてそれは遠い事ではあるまい。



ある等差級數の畫面的構成

加藤正雄

□

六月末に僕は牛込會館で國民劇のセットをやつた、勿論脚本が脚本であり、經營者の注文が注文であるために、心に思つてゐる十分の一も思ふ樣なものは出來なかつた（此の事については八月號の「劇壇」に少しかいてある）があれがすんでからの話が面白い。

僕はあの芝居がすんでから、あの芝居を見た相當な人々に會つた、僕の會つた限りの人は僕の前では、セットを褒めた、それから會はない限りの人では（勿論見た人で知つた人）道具がチャチだとかまづいとかいふ悪口ばかりだつた。

僕はどちらもくすぐられる樣にしか感じなかつた。

褒める方も甘けりや、悪口云ふ方も甘いと思つた、しかしすべて世の中の人間は甘い甘くないにかゝわらず此の類が多いのだ。

と同じ樣にマヴォに對してもこんな氣持を持つてゐるものが多いに違ひない。

だがマヴォは手かげんしない、他から壓倒される何物もないからだ、そして我々は藝術の最高體のために最も強い運動へ向つて動きつゝある。

人々はやがて、間もなく已が石ころである事をたまらなく感ずる時が來るであらう。

その時のためにMVMV。

（一九二四、七、八）

革命前夜の踊り序詩

矢橋公麿

心臓は赤く、上衣は緑なるを見る。今汝の如くへし歪みて立つ
只殊さらに捻曲れるはお前の乳房か
貴族の子！
彼は乾からびたお前の塵溜に鼻爛して灰色だ。
くろぱら　くろぱら　くろぱら
赤絹のリボンは打ちのめされ
俺の毛髪はとぎすまされた鋼片と——その金粉もて掩はれたる世界に島道するろば
白——鉛管　管　接吻低下
お前は眞摯に語り　お前は靜謐にほゝえみたる男を見たる。
そして着物をきた。
脂ぎつた肥太な王女さま
目をつむつた石ころがある——口があるしとやかに自由は假名の鎖線　煤煙
おゝ——と
口　口　口　!!!
謀叛の本能は×××××××す
而して唇の觸覺にマグチシユウムの光を飛ばす
道は岐れ
牆壁は起つ
妾の嘔吐——○○の陰影　。
腸はぼろぼろとこはれおちて黑い
男は唄ふ

汚臭

薄毛の黄色い猫か
只黑い　眞黑だ！
腦味噌に音する齒車
道　道　道
汝等が腸に黴　壯嚴となり
何たる　膠の如くこましやくれたる
おッ　から〳〵なる皮膚
おッ　素朴な容器——とてもけだるいもの引きのばせるか!!
强壓武力的——搾取行爲。時代
欺瞞連續。轉更經過
あゝゝ　ごみためにむらがるいんけんさ　そして
黑ぱらの園に呼吸し淫賣婦たちは
セルロイド製キユピーの小惡魔たち
地が噴出する奪略を!!

澤青鳥

麿公橋矢　像畫自

—X—から始まつた有聲音詩型

ヒデ・キノシタ

——

X,, ……

Xa bp BBRU AAA Bae PIK.

KKK kkk——DA K, Die KE

——GOearT……!!!

OR OR PUR SUKai

× × × × × × ×

——?——

MN MNNn ma DA DA Di——

Ps PU LA IE ～～～～～～～～

XXX……YYY……T……ol OH !

" Co co Co cO co ——

Ho……Bup——Wii

Ev

TTT——t. t. t. mm mm

ZZZZZZZ " " " " "

! ! !

高壓線を追ふ

柳瀬正夢

そのトキ DACHOW のごとく馳けてゐた……

みたとき

ムチはチツツクで張り裂けようとした

はじかれるもののごとくに

それからウイ〳〵と一個のお前を

めんめぐつたのだ

クロ〳〵とホチたくましくつくられて

たいごせいぜんとかけて行く

張りつめたるお前等の心と心

私は濕つた綠の上にのたうち廻つて

ススリないた

イン〳〵としたカゲを拔け

イン〳〵としたカゲにかくれて

カゲともろともイン〳〵と消えて行く

ソノ日よりずつと……キノウもそして今日も

オマヘ達は涯しなき空間をドコへ行くのだ！

（一九二四・七・七）

舌足らずの詩

戸田達雄

オナニズム

もしも充分だつたら

多分W・C・の中に

灰色の幽靈がでるだらうよ。

ちつぽけな　ちつぽけな

ことにゆびの細さに於て比類のない幽靈。顏も

ちつちやい。

そしたら箸のやうなものでつまんで

お池のなかへはうりこまうよ。

はじめ浮いてゐて

しまひに沈むよ。きつと！

きえてゆく戀人

一つの幻のきえてしまひ

なんにものこらず

一つのはなびら散つてしまひ

なんにものこらず

このへんてこな影のみもだゆる

よにもまれなるけしき

白い花ばかりさきひろがり

一めんに白くなつてしまつて居る中で

みぢめな戀人は足を投げ出したが

そのあせたスカートの端のはうで

靴裏のすりへつた鋲が光つてゐるではないか

彼女は自分の足の先きを

しみじみとみてしまつた

食　慾

あの重たいやうなわらひがほは

どこへかくれてしまつたのか

壁と壁との奥ふかいところで

いつもいつも

かなしいにほひをはなつてゐたのに

ひどくぼんやりと光つてゐたのに

厄介な食慾だなあ

ここに光つてゐるのはストーブの火だよ

どこへ落としてしまつたんだらう

そんならストーブのとびらをひらいて

銀のないふふおーくのたぐひ

白い皿のたぐひ

こーひー茶椀のたぐひ

りんごのたぐひ　ついでに厄介極まるおれの食

慾までも

みんな投げこんでしまはう。

雄　達　田　戸　　チ　ヤ　ト　ン　ボ

赤き指紋

高見澤路直

暗青色の圓球の運動
粉末飛散 ZIGZAG
自色粘液砂……
乾砂 赤き指紋 粗面白布片
群青布片
黒 群青 半圓球
半透明方形

陰影を殺す（前號の續き）

澤　壽郎

2. SZene に出た青い職工服の男が大きな斧をかついで、口笛を吹きながら降りて來る。

ピストルの音がする。

金屬性の音が盛にする。

右から美晴らしく大きい、肥った男が白と青の交錯した服を着てノコ〳〵出て來る。

職工服の男がその前を通り過ぎようとする時肥った男ヒョイとその斧をひったくって職工服の男を蹴飛ばす。

職工服の男、畏しい笑ひ方をしながら、頭をヒョコ〳〵下げて云ふ。

――その位にしておいと呉れよ。俺はまだ飯を食はねェんだもの。――

肥った男、構はず職工服の男を摑んで灰色の入口の中へ投げ込む。そして斧をかついでノッシ〳〵と階段を昇って行く。

――人殺し。人殺し――あッ、やられた。――助けて呉れ――　なゝ云ふ聲が突然上でする。

自動車のラッパが聞える。

黄色い布を巻いた男、走るやうに降りて來て、階段の下にしゃがむ。

再び自動車のラッパ聞える。

カーキ色の職工服を着た男三人、左から出て馳せ昇って行く。

鎖を引ずる音が又する。

立派な紳士、首が切られて無くなってゐる、その自分の首を抱へて氣取った樣子をして降りて來る。靜かに右へ入る。

口笛が三度する。

黄色い布を巻いた男、そっと立上って右へ歩きながら云ふ。

――こんなつまらねェのって又とねェな。――

引込む。

大勢の哄笑が聞える。

青い職工服の男、チョット首を出してすぐ引込める。

鎖を引ずる音

汽笛の音。　　幕

この三つの SZene に於て人は興味や連絡を要求してはいけない。私はこれを人の嘲笑と倦怠と憤怒の前に提供するのだから。（了）

挑戰

高見澤路直

舞臺――暗黑。靜寂。

正面に黑き薄布張られ、充分なる沈默ののち、黑布の裏に多量のマグネシユームを焚く音、黑布を透す光りの中に大勢の縛められたる人影映る。再度三度マグネシユームの音聞える。觀客席の到る所から拳銃の響。同時に觀客席の到る所からマグネシユームの音。叫聲悲鳴混然と湧き返り起る。兩側の窓硝子に投石する者、床を踏み鳴らす者。舞臺の黑布の影からは時々爆發する樣なマグネシユームの音と光りに鐵鎖に縛られた人影の呻く象ちを瞬間的に映し出し、幾多の異る火藥のさまざまの爆發音。

此間觀客は常に高所から投下される濃れた粒狀の物體を浴びせられて居る。舞臺の黑布に縛られた人影の映る時には場内に裝置された强い電流の痺れを全身に感じさせられる。此騷然の裡に紅色の曲線の旋廻するグラビリックス場内一面にのた打ち廻り始めると、漸次爆發音其他の騷音消えて舞臺の黑布は白布に變り、裏面からプロヂエクターで照らす。グラビリックス消え、白布面にさまざまの型ち現れ動く。(圓、方形、輪、丁字形、牛圓、線、蝶狀形、其他不規則なる輪郭を有つ型體)夫れも悉く遊動浮沈、或は固着し、或は消え現れするうち、一箇の型體は遽次焰火して他のすべての型體を覆ひ盡し、舞臺反射的薄光を殘して暗くなる。

其時幻燈に依る赤さ一點幕布に現れ、急に視覺の殘像を利用した波狀運動、捻轉旋廻、渦狀運動、出鱈目運動。そして段々膨張して眩しい赤い面の幕布を埋める時、再び觀客席の各所にマグネシユームを焚く音起り、幕布面急に碧色に變り、管器サウンドコンストラクター緩やかに鳴り出で、右手より直經六尺程の黃色扁平圓體二個現れ、左手に轉り乍ら入る。續いて倚大きな黑色扁平圓體數箇、更に稍少なる赤色圓體或ひは元の如き黃色大なる褐色、瑰綠色右より左に、或は左より右に、早きもの遲きもの、遂に舞臺中幾十個の圓體に埋め尽されたる時、管器サウンドコンストラクター止み、遠く喇叭鬧ゆる。同時に赤さトップライト點じ、鐵聲起り、叫ぶ聲幾拾の圓體から同數同色の圓錐形現れ哄笑する。圓錐形からは手と足が出て居る。

夫らやがて歩き出し、時々哄笑する。突如崩れる如き大爆發音轟き、同時に暗黑に返り、暗黑のまゝ十分程　幕。

第二場。物の焦げる匂ひ場内に充ち、

打器サウンドコンストラクターの奏曲に幕あく。

亂調のサウンドコンストラクターに合せし暗黑の中に燐光を全身に塗りつけた五人の人間の亂舞。時々赤い斑光が舞臺に映る。二三分間亂舞踏續く時、觀客席後方に罵聲起り、次いで毆る音悲鳴呻き(此時サウンドコンストラクター止み燐光の男逐消える。)烈しい爭鬪の物音大勢の人逵のざわめき、物を壞す音、やがて人人に依つて二三人の男捕へられ、暗黑の舞臺に擔ぎあげられ、毆る音蹴る音罵る聲。

暫く喧囂を極めて殺してしまつたことを叫び乍ら降りる。

舞臺正面四ヶ所から硫酸素瓦斯の物凄い青い火を噴き出す。觀客席前方から頻りにマグネシユームを燃く。酸素瓦斯の炎は六尺程の黑い球面から噴き出して居る。左の球面は銀色、右が金色、中央が黑色、暫らくピアノの輕き曲きこえ、觀客席には不愉快ならざる香氣を漂はす。三個の圓體フラフラと昇騰し、或は下降し、各々運動し始めると、フットライト點く。次いで酸素瓦斯の炎消えてトップライト點き、上方からさまざまの型體の人間繩にぶら下つて舞臺に下りて來る。(長方形、圓錐形、圓錐形等々。)そして無愛想にすぐ右と左に分れて勝手に舞臺から姿を消す。三個の球面體再び跳躍し始める。跳躍は爭鬪となり、三個互ひに衝突し重なり合ひする内、上方より電柱大の丸さの丸太棒、無數に落下し、石油罐、石塊、鐵片等同時に落下し或ひは燃燒しつゝ舞ひ落ちる紙、布片等。此時打器サウンドコンストラクターの奏鳴、電流は頻りに觀客の全身に感じ、場内各所から爆發音響き、舞臺の電氣消え同時に蟲音轟き、三個の球面體崩壞し、火を發して燃上する。觀客席の兩側の窓外にも炎見え、恰も觀客は火に包まれた感じになる。舞臺前方に白幕垂れ球面の燃上する炎に映つて踊り狂ふ多數の人影見える。やがて燃ゆる物消えすべての音靜まる。(但しサウンドコンストラクターのみは烈しく奏鳴する)時上方から再び繩に依つて十數個のさまざまの不可思議なる美はしき型體降り不可思議なる亂舞踏を始む。打器サウンドコンストラクター益々高潮して鳴り出づ。觀客席からも又是に和して足踏し、木片、鍋鏈、鐘、太鼓も鳴らし而も不可解なる合唱を始める。幕

Kapitalo kaj mukmendbato

繪具と材料は

ツカサへ

ツカサ商會

本郷四ノ九

垢抜けのせる額縁……

眞に優れたる繪具……

信書堂繪具店

東京神田區通神保町五

世界の新しい藝術雜誌

DE STIJL	Th'eo. Van Doesburg : av. Schneider 64. Clamart. Paris.
MA	Lajos Kassak : Amalienstr. 26. Wien—XIII
NOI	Enrico Prampoljni : Via Tronto—89. Rome.
HET OVERZICHT	F. Berckelaers : Turnhoutschebaan—105. antwerpen (Belgique)
DER STURM	Herwarth Walden : Potsdamer str. 134a. Berlin W. 9.
MERZ	Kurt Schwitters : Waldhausenstr. 5. Hannover.
ZWROTNICA	Thad'el Peiper : Jagiellonska—5. Krakow.
MANOMETER	Emile Malespine : Cours Gambetta. 49. Lyon.
BROOM	H. A. Loeb : Via Leccosa 68. Rome.
BLOK	H. Stazewski : ul. wspolna 20m. 39. Warszawa.
STAVBA	Charles Teige : Kolkovna—3. Prague Ic
MECANO	I. K. Bonset : Jaagpad 17. Leiden (Holland)
L'EFFORT MODERNE	L'eonce Rosenberg : 19—Rue de la Baume (8e) Paris
DISK	Krejcar-Seifert-Teige : Cerna 12a. Prague IIe
MAVO	T. Murayama : Kamiochiai 186. Tokio (Japan)

1 Num. : 0.40 Yen

12 Num. : 4 Yen 80 Sen

EAST ASIAN LIBRARY UNIVERSITY OF CALIFORNIA AT LOS ANGELES